

＜巨魚取り込みシステム（特許）と其れを使った完全置き竿釣法（特許）の説明書＞

ー巨魚取り込みシステム（ニューモデル）、型式：WG8210W22/30ー

30年の使用実績、大物巨魚の取り込み多数

製造販売：服部商会

大物用落とし込みダブルギャフとそのシステム及びギャフ掛け方法（取り込み方法＝やり方）は特許、特許全八項目：特許第4988949号及び特許第4988970号

「落とし込みダブルギャフ」は登録商標：登録第5540603号

巨魚取り込みシステム（滑車方式）には、沖磯専用モデル（ロープ長22m、型式：WG8210W22）と地磯堤防モデル（ロープ長30m、型式：WG8210W30）とがあり、両者はロープの長さが異なるだけで、他は全て同じです。ロープを滑車（＝ギャフ連結）で折り返してダブルで使用し、支点（ボルト、ハーケン等）連結に1m必要ですので、沖磯専用モデルは高距10m迄、地磯堤防モデルは高距14m迄の使用となります。沖磯は瀬渡しで渡った近くに竿をセットしますので、10mを越える足場に竿をセットする事はまず無く、ロープは22m有れば足ります。此れに対して、外洋の堤防、地磯はしばしば実質高距10m前後必要で、ロープ長は30mになります。

南海の10mの足場から、40kg級巨大魚を単独で足元に上げる事ができるのは、本巨魚取り込みシステムしかありませんので、そういう釣りを目指す強者に本システムを使って頂きたい。

巨魚取り込みシステム（ニューモデル）仕様：

巨魚取り込みシステム（ニューモデル）	沖磯専用モデル	地磯堤防モデル
型式	WG8210W22	WG8210W30
ギャフ（カエシ付き）	フック軸径8mm、全長21cm、フトコロ8cm	
ロープ（ナイロン編み）径×長さ	9mm×22m	9mm×30m
システム総重量（うちギャフ自重345g）	1800g（うちロープ1110g）	2213g（うちロープ1518g）
適用範囲	7kg～40kg（二人だと70kg、耐強度はフッカー一本で70kg）	
適用高距	3m～10m	3m～14m
材質	ステンレス（高強度鋼）	
主たる対象魚	底物（アラ、クエ、モロコ）等	大型回遊魚（GT、磯マグロ）等
製造、販売	服部商会	

1）基本説明

巨魚取り込みシステム（特許）は簡単に言えば、滑車を組み付けて魚の重量（W）の1/2の力（ $W \times 1/2$ ）で上げられる様にした物「人の力＝ $W \times 1/2$ 」です。正確に言えば、「（魚の重量（W）＋堤防又は磯表面の摩擦抵抗） $\times 1/2$ 」です（滑車の抵抗を0と仮定した場合）。通常の引上げ（ロープで魚を直接引き上げる＝滑車無し）は、「人の力＝W」です、正確に言えば、「人の力＝魚の重量（W）＋堤防又は磯表面の摩擦抵抗」です。釣り人の手に掛かる負荷は、滑車を使えば、滑車を使わないで普通に上げる時の、半分になります（滑車の抵抗を0と仮定した場合）。此处で滑車の抵抗はゼロでないものの、ローラーがスムーズに動く限り、小さいので、一逆の言い方をすれば一、通常の引上げ方で上げられる限界重量の二倍近い重量の魚が、滑車を使う事により、上げられるようになります。通常のやり方（＝滑車無し）で、40kgの魚を9mmか10mmのロープで10m上まで一人で引っ張り上げる、などという事は普通の体格の人にはできません（実際にはこれに摩擦抵抗が加わります）。加えて釣り人は魚とのファイトで腕力を消耗してしまっているの、益々引き上げる力は無いです。此处で滑車を利用すれば、一人で40kgの魚を上げる事が可能となります。本巨魚取り込みシステムでは、図に示された通り、滑車をシステムに組み込んで使います。本巨魚取り込みシステムは高場からの単独ギャフ掛けを可能にするともに、通常の引上げ方法（＝滑車無し）では上げられないサイズ（重量）の魚を上げる事を可能にしているのです。

2) 詳細説明

巨魚取り込みシステムは大物取り込みシステムに滑車を組み付けたシステムの事です。完全置き竿釣法（特許）とは、ファイト時のみならず、取り込み時に於いても、竿を竿受けに置いたまま一切起こす事無く、巨魚の単独取り込みを実現するもので、本巨魚取り込みシステムを利用する事により初めて可能となる、取り込み方法を主軸とした釣法です。完全置き竿釣法では、仕掛け投入後は、魚を足元に横たえる迄、基本的に、もはや、竿は一切起こしません。まず、巨魚取り込みシステムの滑車の説明をしますと、事前に足元回り（＝竿回り）に支点（ボルト、ハーケン等）を設置します。ロープの中央に滑車を位置させた状態で、ロープの一端を支点に固定し、ロープの他端を手で引っ張れば（実際には両端とも事前に支点に固定し、片方だけを引っ張る）、支点と手とは同じ力が掛かりますから、滑車に連結されている負荷（＝魚の重量＋ α ）は二等分され、簡潔に言えば、魚の荷重の $1/2$ の力を釣り人が発揮すれば、魚は上がります（その代り、上げる距離は二倍）。正確に言えば、「（魚の重量＋磯又は堤防表面の摩擦抵抗分） $\times 1/2$ 」（滑車の抵抗を0と仮定した場合）の力を釣り人が発揮すれば魚は上がります。即ち、荷重の半分は支点に受けてもらい、残りの半分だけを釣り人が引き受け、其れで魚を上げる事ができる訳です。此れが滑車の威力です。滑車の抵抗は0では無いもののローラーがスムーズに動く限り小さいので、逆の言い方をすれば、滑車を使わないで普通にロープを引っ張って上げられる限界重量の魚の二倍近い重量の魚が、滑車を使う事によって上げられるようになるという事です。二人又はそれ以上でしか、大物釣りには行かないという人は、こういう理屈を理解する必要はありません。人数さえいれば、知識は必要ではなく、どうにでもなります。然し、若し単独釣行でありながら、本気で30～40kgの魚を取り込もうと考えているのなら、本巨魚取り込みシステムは不可欠の物です。即ち、本巨魚取り込みシステムは、第一に単独ギャフ掛けを可能にする（その理屈は青物用及び大物用と同じです）と同時に、第二に通常の引上げ方では一人では上げられないサイズ（重量）の魚を上げる事を可能にしているのです。そして此の二つの機能は図によって示された通り、シンプルで携行性に優れたな構成により実現されています。完全置き竿釣法は、此の巨魚取り込みシステムを使って行います。使っている竿が、若し1kg程度と比較的軽く（＝柔らかく）、又体格面で恵まれていれば、スタンディング又は尻餅ファイトで、魚を寄せる事も可能でしょう。然し、若し使っている竿が1.5kg以上のアラ（クエ）竿の場合（此れを剛竿と呼ぶことにします）、巨魚＋剛竿では、モーメント（＝トルク）が高すぎて、一人では竿を立ててどうにかするなどという事は、不可能です。板バネは一つのアイデアですが、重くて嵩張る事（比較的軽い物はやたら値段が高い）と、竿が硬い場合ボルトに高い負荷が掛かる事（岩質の状況により抜ける危険がある）が難点です。剛竿＋セパレート方式（竿尻受け＋前立て）でやっている人に、本巨魚取り込みシステムと其れを使った完全置き竿釣法はベストフィットです。この場合のやり方は次の様になります。右足で竿尻受け（ロータリーピトン）を踏みつけ、体重の半分程を掛けた状態で、ドラッグを締め、皮手袋をした左手で糸を抜き、同じく皮手袋をした右手でリールハンドルを回して、魚を竿下迄寄せた後、前立ての前側で、ラッピングワイヤー4を道糸ごと竿に巻き付け、他端のループ部42をカラビナ2に掛けた後、プッシャー兼プラー（8、特許）でギャフセットを竿伝いに押し出し、落します。竿は一切起こしません。落とし込むとギャフセットは魚の口元に確実に到達します。後は青物用、大物用と同じですが、此处ではロープがダブルになっているので、二本一緒に握ったまま、ロープを上下させると、ギャフは魚体の何処かに簡単にフッキングします。魚を見てギャフをコントロールする必要はありません。ロープだからコントロールはできませんし、夜だと10m離れていれば、ヘッドランプの明かりでは、ギャフなど見えません。手にズシリと重みが掛かったら、力一杯、ロープを（二本一緒に）引き上げると、ガシリとギャフが食い込み、引上げOKとなります。その状態になれば、カエシが効いて、もはや、ギャフが外れる事は少ないので、ロープを持つ手を緩めて、その手でドラッグを緩め、二本のロープの片方を離し、片方のみを握って引上げを開始する（ロープの両端は両方共、事前に支点に固定しておく）。此れにより、滑車は動滑車として作動し、荷重（＝魚の重量＋ α ）の半分は支点が受け、残りの半分のみを釣り人が引き受ければよい。此の理屈により、40kg級の魚でも、単独で上げることが可能となります（実際は磯又は堤防の表面状態による）。板バネを使っている人は角度を低めに設定するか、又はラッピングワイヤー4を板バネの前側で竿に巻いたのち、竿尻の固定ピンを外して、竿を傾け、ギャフを落としてもよい。

3) 大物用落とし込みダブルギャフの説明

本品は、大型回遊魚（GT、磯マグロ、キハダ）、底物（アラ、クエ）等を主体として、7kgから40kgの魚を対象とします（二人いれば耐強度70kgまで可能）。魚の重量には堤防又は磯表面の摩擦抵抗が加わります。ギャフ自体の耐強度はフッカー本で70kg（＝設計値、サンプルテスト済）ですが、強度は熱による組織変化により、個体差があり、本品はこの数値に関して、如何なる保証も致しません（参考値として留意し、壊れない範囲で使ってください）。本品はその素材に高強度鋼を使用しており、一般鋼種（SUS304＝18－8ステン）ではありません（市販の殆どのギャフが此れ。ステンとだけ表示され、具体的材質に言及していないギャフの略全てがSUS30

4と考えて間違いありません)。本品は軸径8mmですが(8mmでSUS304ですと、実釣では30kg程度の魚で簡単に口が開くという事は承知しております)、サンプルテストの結果及び硬度表から、本品は同径SUS304製品の3倍以上の強度を有していると推測しており、70~80kgの魚にも十分対応できる筈ですが、前記理由から、数値は如何なる保証も致しません。強度に関する説明は大物用に詳しくしてありますから、そちらもご覧ください(ギャフ自体は大物用と同じですから)。

従来法では今まで、大物の高場からの取り込みには、フライングギャフ、イカリ型ギャフ(タコ足型一投げ込み方式)、ガイド道糸取り付け型ギャフ、落としダモ、大型長柄タモ等が使われてきました。然しながら、これ等の方法で、5mを越える高場から5kgを越える大物を、単独で(自分一人で誰の手助けも無く)、確実性高く取り込む事は、竿が短くて比較的簡単に道糸が掴めるルアーの場合を除いて、非常に困難でありました。本発明の大物用落とし込みダブルギャフと其れを使った巨魚取り込みシステムは大物、巨魚の高場からの単独取り込みを高い確実性で可能にするものです(特許はその理由により与えられたもの)。本ギャフシステムでは、十分に離れた高く安全な場所から、魚にギャフを送りつけ、フッキングさせ、約7kgから約40kgまでの魚を足元まで上げることが、完全単独で、高い成功率でできます(二人いれば70kg迄可能)。然も高い携行性を有します。本ギャフシステムは、一人である事、距離がある事、更には魚が大きい事ですら、障害にならず、容易且つ確実にフッキングに到達できます(通常15秒から20秒程、長くても一分以内)。本巨魚取り込みシステムは、1.5kg以上のアラ(クエ)竿を用いた置き竿ファイトに適しております。本巨魚取り込みシステムは、置き竿ファイトに於いて、プッシャー兼ブーラー(8、特許)を使用して、完全置き竿釣法(特許)を実行するのに最適です。板バネを使っている人は、板バネの角度を低めに設定して、完全置き竿釣法を実行するか、又はそうでなければ、竿を竿受けに置いた状態でラッピングワイヤー4を竿に巻き、竿尻の固定ピンを外して、竿を傾け、ギャフを竿伝いに落とす形になります。尚、本品は鍛冶鍛造ハンドメイド品です。

4) 事前準備

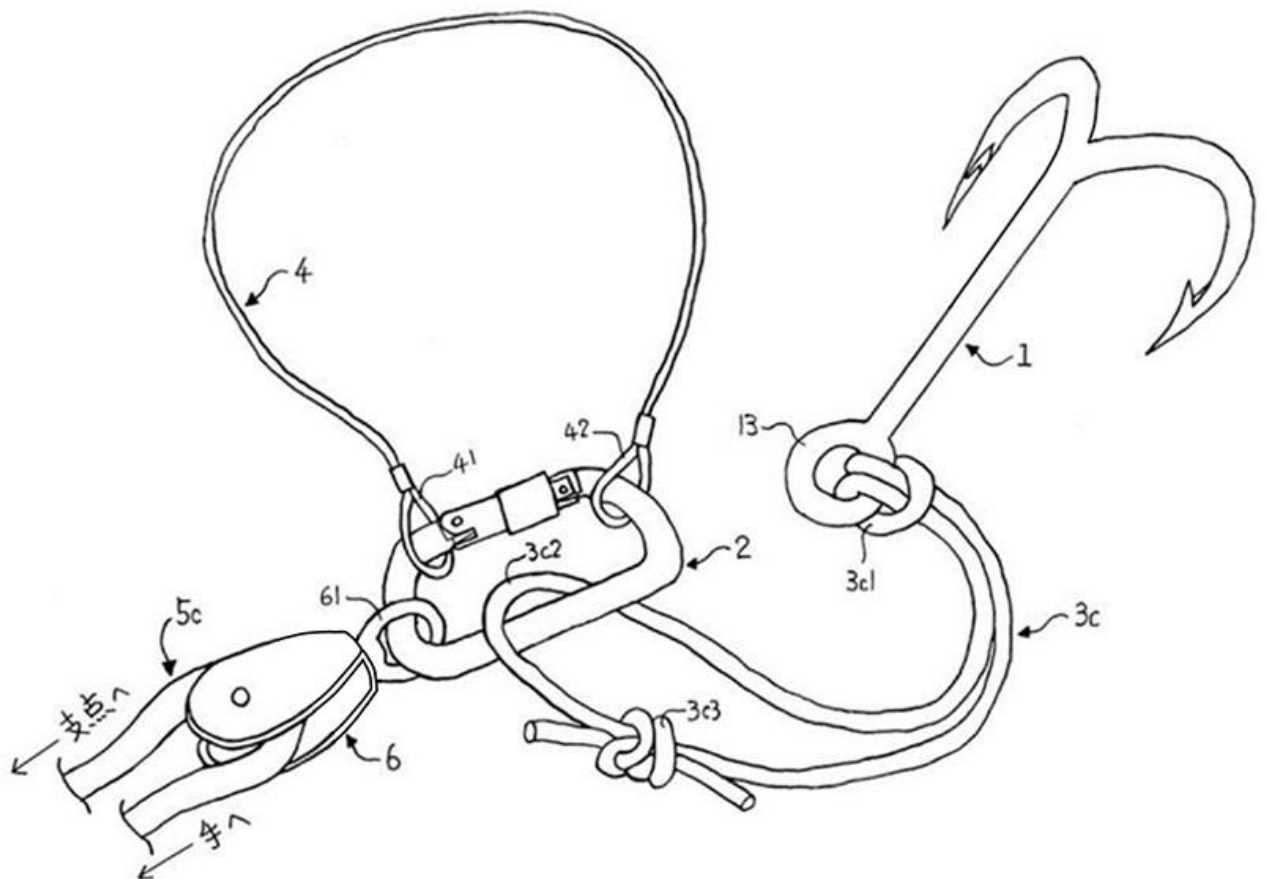
出荷時点でロープ(9mm×22m/30m)とギャフセット(ギャフ1、シュリング3c、ラッピングワイヤー4、滑車6及び安全環付カラビナ2)とは組み合わされておらず、別になっております。滑車はロープの中央に位置しなければなりません。従って、ロープを滑車に通す必要があります。然し、此处で重要な作業があります。輪にしたロープを解いた時点で、キンク(よじれ)が発生している様であれば、キンクを解消しなければなりません。見た目、キンクが見えなくても、以下に述べる、ロープ扱きを使用の前に先ずやる必要があります(「本ギャフを使いこなす為の必須9箇条第1項」・ロープに内在するストレスを解消する為・此れは必須一丁目一番地)。キンクが発生しているのに其れを放置したまま釣りを開始する事は、タモを組み立てないまま釣りを開始することに等しく、致命的です。ギャフを落とす途中でロープが纏れてしまったら、厄介な事になってしまいます。纏れはキンクが引き起こします。ロープギャフを使いこなす事はロープを使いこなす事と同義です。ロープには撚りロープと編みロープとがあり、本品は編みロープです。編みロープには撚りは入っておらず、本来、キンクは発生しません。然しながら、ロープは持ち運びする時には通常、輪にして持ち運びます。此の輪にする時に、巻く毎に捻ってしまっているのです(捻るつもりがなくともそうなります)。其のまま、両端を持って引き延ばせば、ロープ内に多数の捻じれが存在する事になります。此れがキンクを引き起こす要因となります。此れを解消するには次の様にします。ロープ端を、手の甲を上に向けた状態で、左手で持ち、その横で親指同志がくっ付く形で、右手でロープを軽く持ちます。左手でロープを掴んだまま、ロープを持った右手を水平方向右に大きくスライドさせます。次に左手を右手横に持ってきて、再び左手でロープを掴み、右手を右に一杯までスライドさせ、此れを端までやります(言葉で言うややこしいですから、当会シイラビデオ5出だしを参照してください)。右手をスライドさせる時に右手首を向こう側に少し捻りながらやると尚良いです。今度は反対側の端から同じ事をやります。此れを2~3回やります。一回目の時はロープの途中にコブが出来るでしょう。此のコブはロープの中に無理なストレスが有る事を意味します。此のコブが出来る状態を解消しないまま、釣りを開始すれば、肝心の時にロープが絡まって機能しなくなる危険を残す事になります。此のコブができなくなったら、同作業は完了です。此れでキンク(よじれ)は完全に取れます。この作業を、「ロープを扱く」と言います。ロープ扱き(シゴキ)が完了したら、カラビナ2から滑車6を外し、ロープの端を滑車に通します。滑車位置がロープの略真ん中になるように滑車位置を調整します。滑車を略真ん中に位置させたら、今度は滑車の側(=ロープ中央側)から、ロープをダブル状態で、二本一緒に握り、同じく反対側(=両端側)に向かってロープを扱きます。此の時、左手でロープの滑車側(ロープの中央側=ダブルになったロープの一端側)を掴み、右手で二本(ダブル)のロープを一緒に扱くわけですが、二本一緒に掴んだ右手のロープの出側に於いて、二本のロープの間に右手親指を割り込ませ、二本を分ける様にして、扱きます。スムーズにいかなくなったら、右手の向きを変えてみてください(右手の平側が手前側=自分の腹向きから右手の平側を前方向きへ)。ロープの両端(ダブルになったロープの他端側)まで扱き終わったら、ロープの両端

を一緒に結び、結んだ両端側から、ダブルのロープを二本一緒に輪に巻きます。そして此の輪になった、滑車付ロープを、支点（図3に於けるハーケン9g）に掛けられたシュリング（図3に於ける150a）に掛けられたカラビナ（図3に於ける10k）の近くに、結んだ両端側（＝支点側）が下に位置し、滑車側が上を向く状態（ここ重要）で注意を持って配置します。下に位置した、結んだ両端を解き、其々にループを作って、両方共（5c1, 5c2）、同カラビナ（図3に於ける10k）に掛けます。そして最後に、輪の上側に位置している滑車（6）を、ギャフセットのカラビナ2に掛け、カラビナの安全環を回して開口部をロックする。此れにより、準備は完了です。相互の位置関係は図1を参照してください。即ち、図1からラッピングワイヤー4の他端のループ部42のみが外れていればOKです。上記作業は慣れれば2～3分以内に終わる筈です。滑車を家で組み付けて現場に持って行ってもいいですが、ロープ扱きは必ずやらなければならない為、意味がありません。要するにロープギャフの事前準備とはバッグから出して輪を解いておけばよいという事ではありません。

5) 巨魚取り込みシステムと其れを使った完全置き竿釣法の図解による説明：

（本巨魚用ではガイド＝ラッピングワイヤー4の取り付けは、大物用と同じく、竿巻き付け方式を実行する）

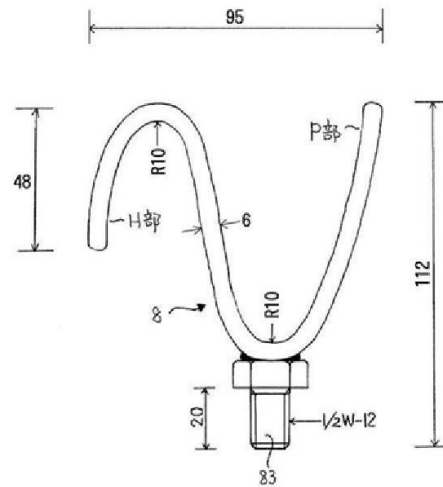
図1



<図1は巨魚取り込みシステムの全体図を示す>（ラッピングワイヤー4両端の両ループ41, 42共閉じた状態）。

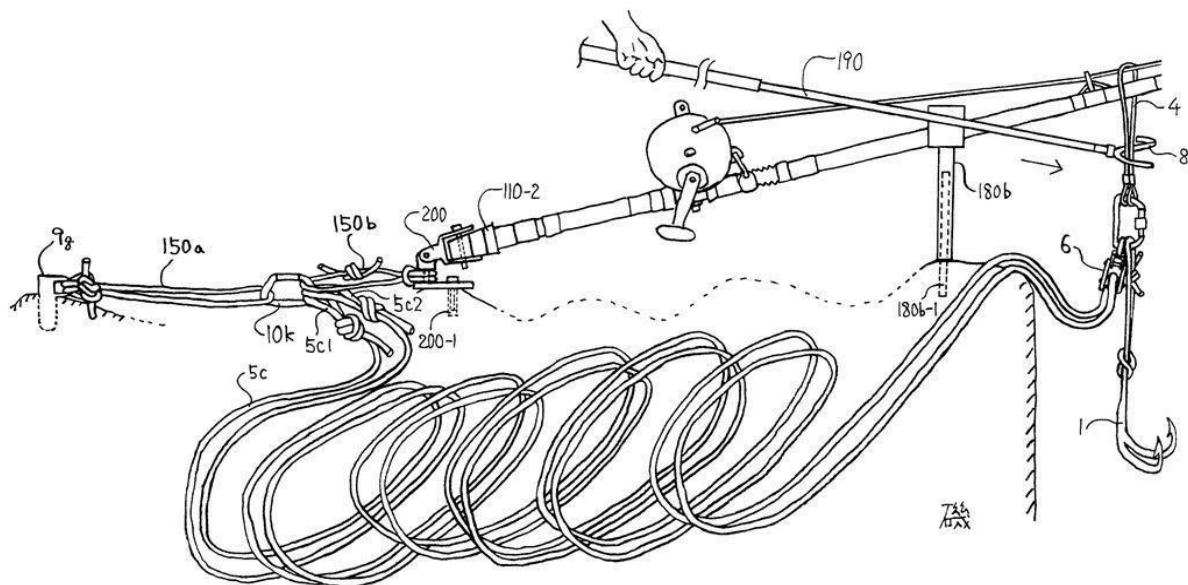
本システムの特徴は滑車6が組み付けられている事である。滑車は、両端が支点に固定されたロープ5cの中央に位置し、ロープの片方のみを引っ張る事により、動滑車として作動し、魚の重みの半分のみを釣り人が引き受ければよい効果を実現する。要するに、滑車の威力で、魚の重みが釣り人にとって、滑車を使わないで直接ロープを引っ張り上げる時の半分になる訳である。

図2



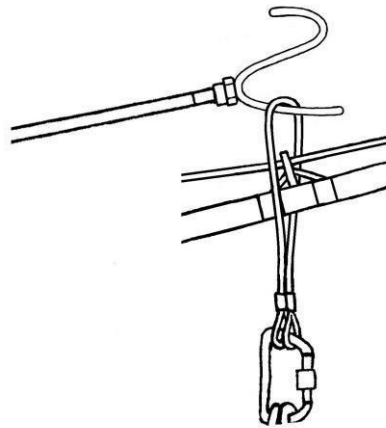
＜図2はプッシャー兼プーラー示す＞。プッシャー兼プーラー（特許）は小物用3～4mのタモの柄に取り付け（ネジ合います＝ウイトネジ1／2）て、使用し、二つの役目を果たす。一つ目は、置き竿ファイトで、竿下まで寄せた魚に対して、ギャフセット（本巨魚取り込みシステム）を竿伝いに押し出す役目を果たす。これにはU字型をしたプッシャー部（P部）を使用する。これにより、ギャフ掛けの為に、竿を竿受けから起こす必要はなくなる。竿を起こしたら、モーメント（トルク）が高すぎて、剛竿での大物、巨魚の単独取り込みなど、事実上不可能である。二つ目は、大型外道の際の、ラインカット処理の為に道糸掴みの為に使用する。これにはフック型をしたプーラー部（H部）を使用する。魚を寄せて、魚の姿を確認した後、本命であればプッシャー部でギャフを押し出し、外道であればプーラー部で道糸を引っ掛けて掴み、ディープシャークをセットして、落とし、ラインカットする事になる。

図3



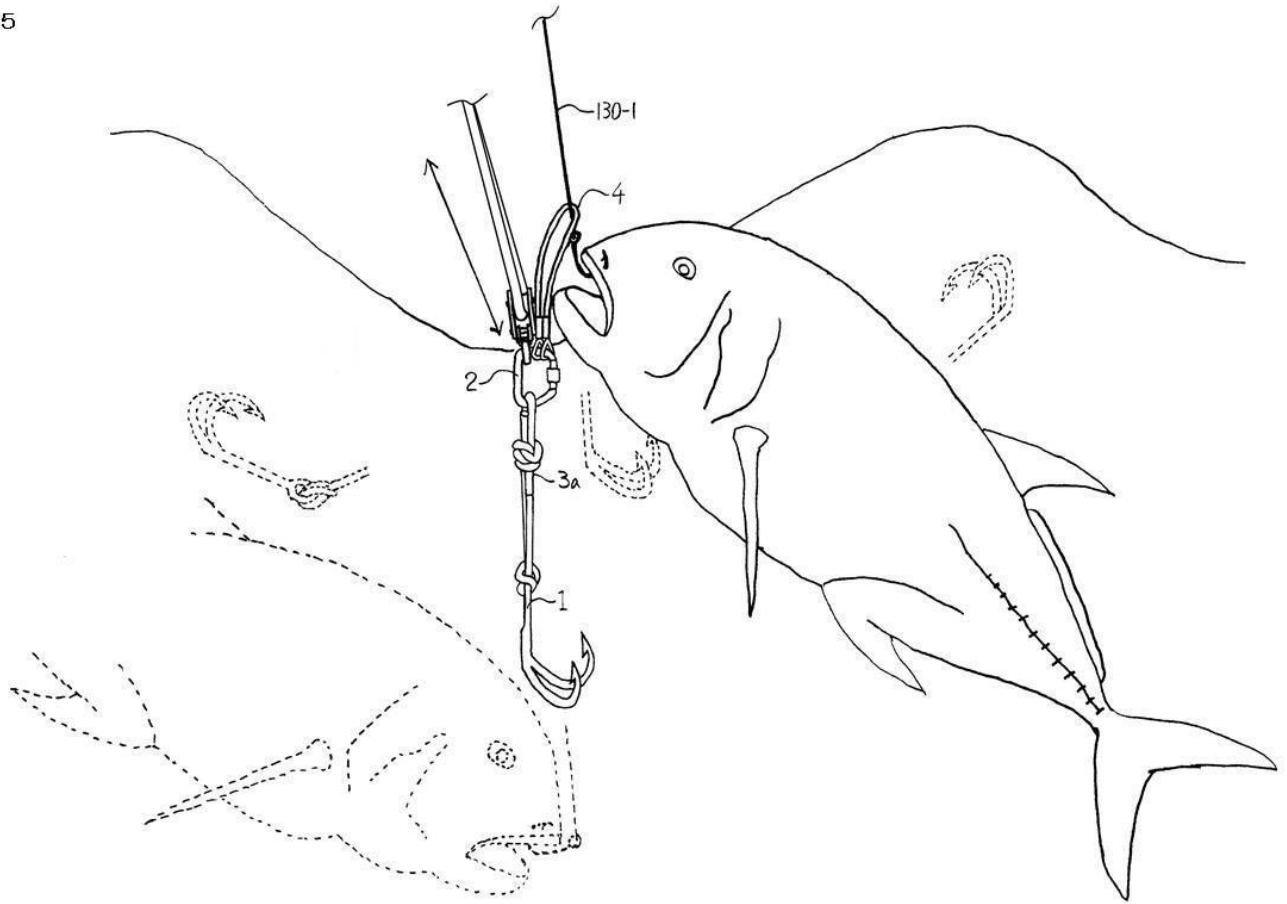
＜図3は、巨魚取り込みシステムを使用して行う完全置き竿釣法の実行を示す図であり、プッシャー兼プーラー8のプッシャー部で同システムを押し出す状況を示している＞。ロープ（5 c）の両端（5 c 1, 5 c 2）は支点（ハーケン9 g）から伸びたカラビナ（10 k）に掛けられ、其れによりロープ5 cは巨大なループ体を形成しており、其の中央には滑車（6）が位置している。滑車はギャフセットに組み込まれて一体となっている。釣り人は魚を寄せた後、竿受け180 bの前側で、両手を使ってラッピングワイヤー4を道糸ごと竿に巻き、他端のループ部4 2をカラビナ2に掛ける。其れにより、ラッピングワイヤー4は、ループ体を形成し、ギャフセットは、ラッピングワイヤー4を介して、道糸に掛かる。此れにより、タモの柄に取り付けたプッシャー兼プーラー8で、ギャフセットを押し出し、落とし込めば、ギャフセットは確実に魚の口元に到達する。

図4



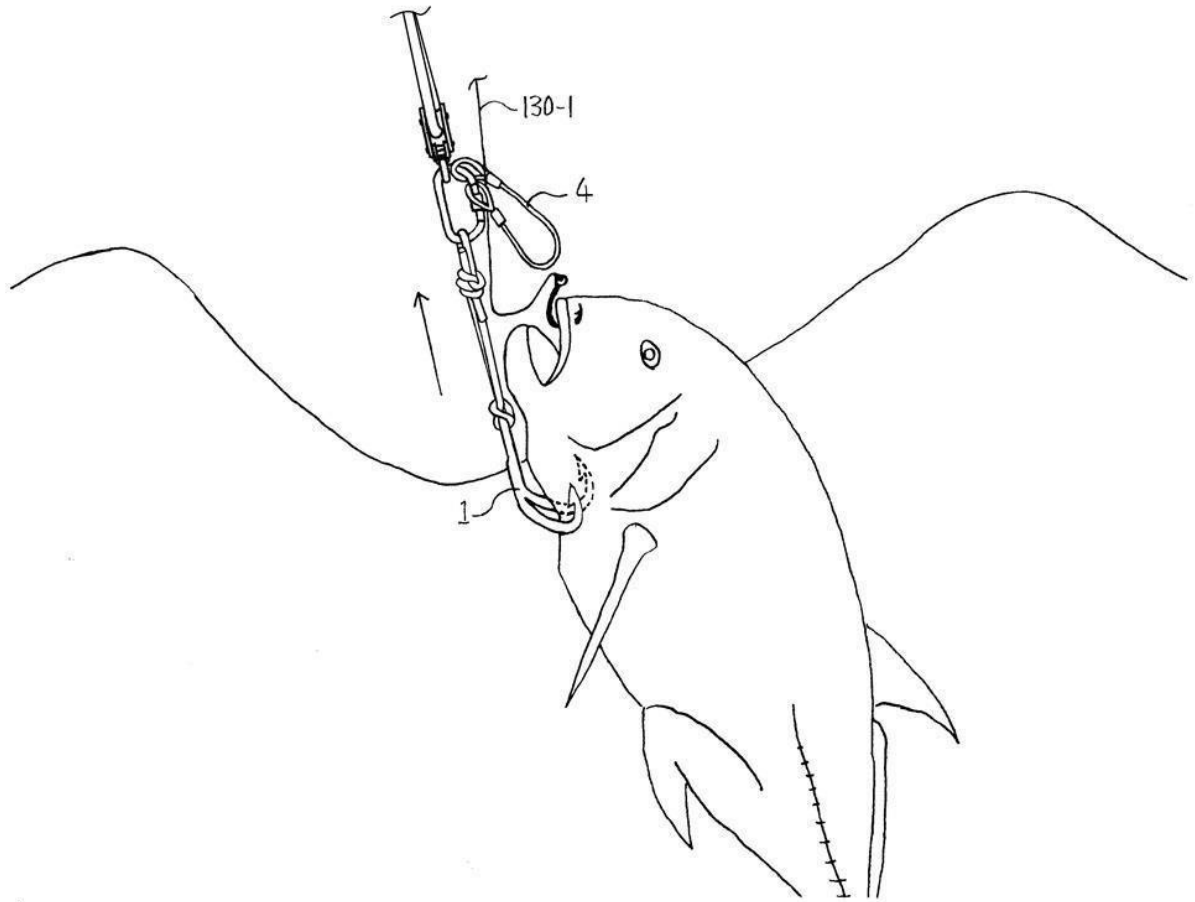
＜図4は、上記図3のやり方でラインガイドの通過がスムーズにいかない場合に、ギャフセットをプッシャー部に引っ掛けて持ち上げ一気に通過させるやり方を示す＞スムーズにいかないのは最初の3～4個のみで、後は魚の重みで竿中から先は下がっているので、ギャフ及び滑車の重みで勝手に落ちる。

図5



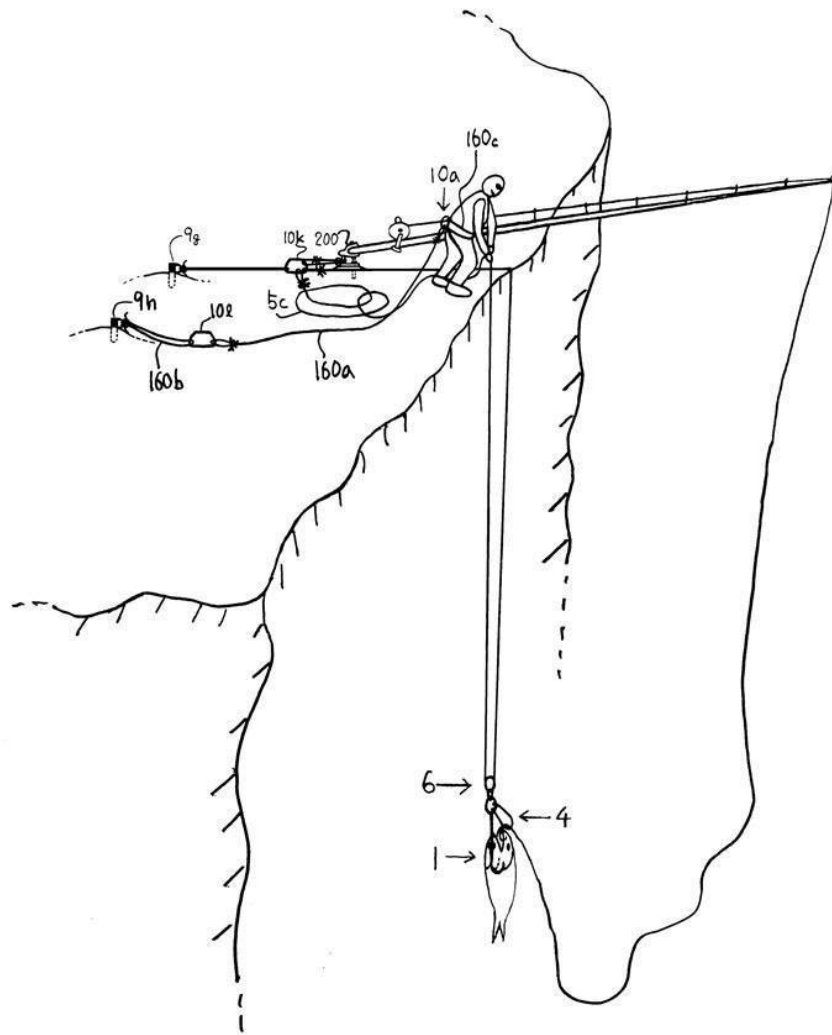
<図5は巨魚取り込みシステムのギャフ掛けのメカニズムを示す>。落とし込んだギャフセットは魚の口元に到達するので、ダブルになったロープ5cを右手で二本一緒に持って、鯛のテンヤ釣りをする要領で、右手を上下させてやると、程無く（通常15秒から20秒程、長くても一分以内）、ズシリと重みが掛かるから、そしたら力一杯二本一緒にロープを引っ張ってやると、ガシリとギャフが食い込み、引上げOKとなる。

図6



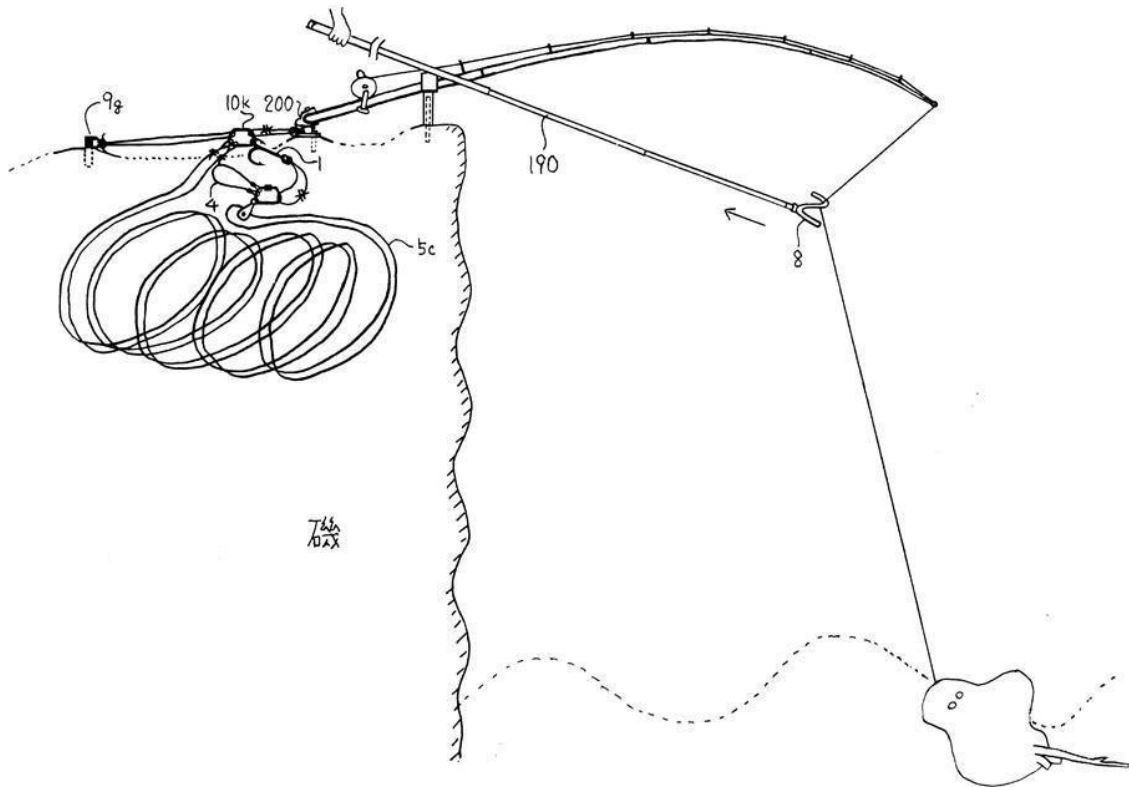
＜図6は巨魚取り込みシステムのフッキングのメカニズムを示す＞。ギャフを食い込ませた後は、カエシが効いて、ギャフが外れる事は少ないから、ロープを緩めても構わない。ロープを緩めた手で、リールのドラッグを緩めて（此れを忘れると、上げる途中でギャフが外れた場合、竿を折る事になる）、両手で魚の引上げを開始する。

図 7



＜図 7 は完全置き竿釣法に適用された巨魚取り込みシステムを使用しての、魚引き上げの状況を示す＞。ロープの一端は支点（ハーケン 9 g）に掛けられたシュリング 1 5 0 a に掛けられたカラビナ 1 0 k に掛けられている。又ロープの他端もカラビナ 1 0 k に掛けられている。此れにより、カラビナ 1 0 k から出たロープは滑車 6 に入り、滑車から出たロープは釣り人の手に達する。釣り人は滑車 6 から出たロープ（＝他端側）のみを掴み、引っ張る。此れにより、支点（9 g）側と釣り人の手には同じ負荷が掛かり、結果的に魚の荷重の半分の力を釣り人が発揮すれば、魚は上がってくる「（魚の重量＋摩擦抵抗分）× 1 / 2 + α（滑車の抵抗）」。

図 8



<図8は大型外道処理の為、ラインカッターをセットすべく、道糸を掴む為にプッシャー兼プラー8のプラー部で道糸を引っ掛けて寄せる状況を示す>。大物竿では道糸迄手が届かないので、外道の際の道糸掴みに苦勞する事になるが、此のプラー部で道糸を引っ掛けて掴む事ができ、ディープシャークをセットして落とし、ラインカットすればよい。

以上のやり方により、巨魚（7kg～40kg）の単独ギャフ掛け、取り込みが可能です（二人だと70kg、耐強度はフック一本で70kg）

6) 危険性の周知、警告←重要

本巨魚取り込みシステムは荷重の半分を支点で受ける訳ですから、その支点が安全確実な物であることが本システム使用の絶対条件です。図3に於いて、ロープの両端（5c1, 5c2）はカラビナ10kに掛けられ、此れはシュリング150aを介してハーケン9gに繋がっておりますので、若し、ハーケン9gが抜けたなら、ボルト200-1が其のバックアップとなります。魚が掛かった場合のボルト200-1の抜けの危険に対してはハーケン9gがバックアップとして機能し、魚引き上げ時はハーケン9gの抜けの危険に対してはボルト200-1がバックアップとなります。又図7に於いて、釣り人は腰のまわりにシュリング160c（＝腰紐）を巻き、此れに掛けたカラビナ10aに、別のリス（割れ目）に打たれたハーケン9hから伸びたシュリング160aを掛け、其れによりセルフビレイ（自己確保）を取っており、その長さは事前調整されています。此れは支点が抜けた場合に備えて、三重の安全策を講じている事を意味しています。磯の上では比較的ハーケンを効かせることができやすいです。ハーケンが効いているか効いていないかは音で判別できます。高い金属音がすれば効いていますし、鈍い音がすればあまり効いていません。又ハーケンは面に直角の方向の荷重には耐力がありますが、面に平行な方向（＝幅方向・・堤防では殆ど此れになる）の荷重にはあまり耐力が有りません。堤防の上ではハーケンの使用は限定され、且つコンタクトが甘い為、ハーケンを使いこなす事は難しいです。若し、堤防の上で、効いていない支点（ハーケン又はボルト）で、荷重を受け、40kgの魚を10mの堤防の上に上げている時、8mの所で支点が抜けた

ら、どうなるか？支点に繋がっているロープや付属物で足をすくわれたらどうなるか？致命的な事故につながる事は確実です。

ロープを踏みではいけません（荷重ラインから体を必ず横にずらす＝抜けた場合にハーケン付きロープが流れる、飛んでくるライン上に体を置かない・・・抜けた場合の事を常に考える）。磯からの底物（石鯛、アラ、クエ等）釣りを全くやっていない人や船や堤防からのルアー専門の人はハーケンにも慣れていないと考えられ、そういう人が、ボルトの使用無しにハーケンだけで、滑車方式（本巨魚用）を堤防で使いこなせるとは、考えられませんし、危険が高すぎます。依って、アラ（クエ）用竿受け（板パネ又はセパレート式）を設置する場合を除いて（この場合は必ずボルトを設置するので此のボルトが支点として利用できる・・・ボルトは横方向の荷重に対しては耐力が高い）、堤防での使用は原則禁止とします。当服部商会は安全確実な支点の設置を本巨魚取り込みシステム使用の絶対条件としておりますので、安全確実な支点であれば抜ける事は有りえず、更に、安全確実な支点に対して、別の安全確実なバックアップを取る事、更に釣り人が安全確実なセルフビレイ（自己確保）を取る事、其のセルフビレイ用支点は荷重ラインとは別のラインに取る事、そして其のセルフビレイ用ロープの長さは、足を掬われて転倒した場合にも、磯（又は堤防）の端（角）から先に体がいかない様、事前に長さ調整されている事を追加の条件とします。本巨魚取り込みシステムはそれ自身の中に何も危険な要素は内在してはおりません・・・使用者が基本的事項を認識し、正しい使い方をする限り。然し、その認識が欠落していれば、重大な危険を使用者自身が惹起するという事です。支点が効いているか効いていないかなど当服部商会の与り知らない事です。以上の様な訳です。で、堤防での使用には大物用の使用を推奨します。磯にしる、堤防にしる、滑車方式を使うレベルに自分が達しているかどうか自分で判断し、どうしても滑車方式（本巨魚用）を使うという人は、後は自己責任です。

7) 使用上の注意

A) 浮き釣りをを行う場合には（一底釣りとは関係ありませんが）、中通し浮きにケミホタルを立てる事はできません。ケミホタルを使用する場合、ケミの長さより少し長めのチューブ（無ければストローの硬いのも可）の周りにケミをセロテープで巻き付けて使用する事も一つの方法です。この場合、上から、浮き止め、ビーズ、ケミを巻き付けたチューブ、ビーズ、浮きとなります。ケミとチューブの間に隙間ができないように、ケミの両側でセロテープが台形状になるように巻いてください。浮きの後ろに隠れて一時的に光が見えなくなる事はありますが、魚の引き込みと一時的な光の喪失との区別は、明確でありますので、実釣に於いて、何も支障はありません。

B) 夜釣りで竿先にケミホタルを取り付ける場合も、ケミの両サイドに隙間が出来ない様に（隙間にラッピングワイヤー4が嵌まり込む事が無い様に）、セロテープがケミの両サイドで台形状になるように、竿先に巻きつけてください。

C) 仕掛け周辺をラッピングワイヤー4がスムーズに通過出来る事を事前に確認して下さい。スムーズにいかない場合は、何か「角」が存在している筈ですから、その「角」を解消して下さい。

8) 保守管理

本ギャフはステンレスですが、使用後放置すれば、含有カーボンの影響により、多少の錆がきます。Stainlessとは錆びないという意味ではなく錆びにくいという意味です。ステンレスにはその組成により、多くの鋼種があり、本ギャフは高強度鋼を使用しておりますが、本品鋼種は、一般的な鋼種（SUS304、等）と比較して、強度面に於いて勝りますが、防錆力に於いて劣ります（此れは、防錆力、冷間加工が出来ない事、鏡面仕上げの難しさ、入手のしづらさ、コスト高といった問題より、強度を優先した結果です）。釣行後は速やかに水洗いをし、乾いた布で水分を拭き取って、防錆油を吹き付けた後、其れを乾いた別の布で軽めに拭き取り、保管する事をお勧めします。その時点で既に錆がきていた場合はサンドペーパー等で錆を落とした上で同作業を行ってください。釣行前には必ず針先のチェックを行い、鈍っていれば、必ずヤスリ又は砥石等で針先を研いで、油を針先に塗布して、持参してください。針先が鈍って魚体表面を滑ってしまつてはフッキングしない訳です。本ギャフでは針先の鋭さは手の甲に当ててチクリと痛みが走る事が必要です。チェック方法は、左手親指を立て、第一関節から先を内側に曲げ、爪を水平にします。その爪に、右手で持ったギャフの針先を垂直に当てます。その状態でギャフを横にスライドさせます。爪上をギャフが滑ったら（＝スライドしたら）ダメ→研ぐ必要があります（出荷時点では爪に垂直に当てれば爪に刺さる様になっています＜ビデオ使用方法 22 技術編に詳述＞）。磯でなく堤防であっても、コンクリート表面には固い小石が混ぜられている事が多く、凹凸が激しいです。魚の重みが掛かった状態で、フッキングしていない残りのフックが表面を擦りながら、上がってくることになる訳ですから、ギャフは過酷な仕事をさせられます。ユーザーの、針先の鋭さに対する感性が無かったら、本ギャフはその能力をフルに発揮できません。本ギャフは、基本設計として、フックの針先の外接線がリングの支点位置に近づくよう、フックの針先を内側に曲げています。従来のギャフは掛ける事だけを考え、針先を外に向けてきました。本ギャフでは、そのシステムの威力が絶大である為、針先の張り出しや、フックの本数に頼る必要はありません。フックの針先が内側に向い

ているため、魚引き上げ時には、リング13が起き（堤防表面から離れ）、フッキングしていない残りのフックの針先は表面を擦るのではなく、表面から浮く（離れる）形となります。此れにより、フッキングしていない残りのフックは、表面の小規模な凹凸は、擦るのではなく、かわすことができます。此れは針先の鈍りを抑えるのに役立つでしょう。本ギャフは、掛けるのはシステム力で掛け、引上げ時の障害物の回避はギャフの構造の工夫で行います。以上の工夫をしている訳ですから、高い感性を持って針先の鋭さに常に注意を払ってください。本落とし込みダブルギャフは「ギャフ」の名称で特許が取得できた日本で唯一の製品です。其の機能の高さは公正な第三者により認められたものであり、本ギャフを使いこなす事（＝ロープを使いこなす事）は必ずや貴方の釣果向上に役立つでしょう。

9) システム仕様

システム	ロープ	高距(m)	取り込み限界（概略、kg）		要件
			一人の場合	二人の場合	
太軸―青物取り込みシステム	6φ―15m	14	20	35～40	無し
大物取り込みシステム	10φ―15m	14	28～30	50～55	無し
巨魚取り込みシステム（本品）	9φ―22/30m	10/14	40	70	足場回りでの支点

（青物用は、大物用を簡易化して機動力を高めたシステムであり、巨魚用は大物用に滑車を組み付けて半分の力で上げられるようにしたシステムです・・・三点の違いは単にロープの太さの問題だけではありません）

製造販売、服部商会

〒862-0901 熊本県熊本市東区東町4-16-9-406

TEL：096-365-0269